

聖書箇所：ルカの福音書 11 章 5～13 節

説教題：求めなさい

1 どのように祈るのか

今日の箇所は二つにわけることができます。まず一つ目は、5 節から 10 節までで、テーマは「どのように祈るか」です。そして二つ目は 11 節から 13 節で、「祈りによって何が与えられるのか」。そのように二つのテーマを取り扱っています。

まず「どのように祈るか」についてですが、イエスはここで一つのたとえ話を語ります。読んでどう思われたでしょうか。どんな事情であれ真夜中に玄関のドアをたたくことは非常識だと思わなかったでしょうか。「めんどうをかけないでくれ。起きて、何かやることはできない」と言う気持ちは理解できます。それが私たちの常識です。

ところが聖書を見ると、まるで私たちの常識に挑戦するように、イエスはこう語ります。8 節。「あなたがたに言いますが、彼が友だちだからということで起きて何かを与えることはないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要なものを与えるでしょう。」

相手が自分の友だちであるかどうかではなく、たとえ相手が知らない人であっても、とにかくあつかましい態度で、非常識と思えるような態度で頼み続けるなら、必要なものが与えられる。これが、たとえ話の要点です。

これを聞いて少々驚いてしまいます。二千年前のイスラエルは、他人への配慮などをしていない野蛮な文化だったというのでしょうか。そうではありません。当時の人たちもこのた

とえ話を聞いて驚きました。いったいなぜイエスはこのような常識に反するようなことを言われるのでしょうか。

9 節で「求めなさい」とありますが、もう少し正確に訳すなら「求め続けなさい」となります。同じく、後に続くことばも「探し続けなさい」であり、「たたき続けなさい」となります。あきらめずに求め続けるなら、このたとえ話のように、求めるものは受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれる。ほかの人がどう思うか関係ない。とにかく常識とか節度とかそのようなことは気にせず、なりふり構わずでもかまわないから祈り続けなさいとイエスが教えているように思われます。

2 何を祈り求めるのか

すぐに納得することは難しいかもしれませんが、とにかくどのように祈るのかはわかりました。でも知りたいことがもう一つあります。「私たちは何を祈り求めたらよいのか。」

このことに関連して、興味深い記事がマタイの福音書 20 章に出て来ます。イエスの弟子であるヤコブとヨハネ、この二人は兄弟でしたが、その母親がイエスの所に来て、息子を出世させてくださいと願ったというのです。この願いに対し、イエスはこう言われました。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。」

この話から教えられることが二つありま

す。一つは、自分が何を求めているのか客観的に見極めることは、かなり難しいということです。もちろん、祈るのであれば主のみことろにかなった祈りであることが理想でしょう。でも、何がみこころであるか。最初からわかるのだったら苦労しません。わからないから祈るのです。

この母親の願いは、率直に言ってきわめて自己中心的です。こんなことを神に祈るべきではないかもしれません。しかしどうでしょう。息子の幸せのことを考えたら、どんな母親でも冷静でいられない。心配のあまり、自分の願いをイエスにぶつけていきます。それは二千年前のイスラエルであろうが、今の私たちだろうが何も変わりません。

こんな祈りはしてはいけないのでしょうか。それがここで教えられることの二つ目になります。イエスはこの母親の願いをどうされましたか。確かに「何を求めているのか、わかっていないのです」とやんわりと注意はします。でもイエスは母親の願いを拒絶はしません。いやそれどころか、母親の願いをそのまま受けとめながら、こんなことばを続けるのです。「私が飲もうとしている杯をのむことができますか。」母親のきわめて自己中心的な願いを、このようにしてイエスは新しい意味につくり変えていこうとします。

祈る前から恐れる必要はありません。主はどんな祈りでも受けとめてくださる。その信頼をもって私たちは何でも祈れる。もし不完全な祈りをしたとしても、そんな祈りをも主はすばらしい祈りにつくり変えてくださる方である。そのような方であることを覚えることができます。

3 祈りによって与えられるもの

さて、今日の箇所の後半のテーマに移ります。祈りによって何が与えられるのか。11節から13節の前半を読みます。「あなたがたの中で、子どもが魚をくださいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるでしょうか。卵をくださいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょうか。してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。」

イエスが祈りということを私たちに教えるとき、父親と子どもとのやりとりを基本にしていることに注意したいと思います。神は私たちの父親であり、私たちはその子供たちであるというとらえ方です。

先ほど見たように、私たちは神に対して遠慮なくどうどうとまったく自己中心的なことさえ願い求めることができると言いました。それはまさに小さな子どもがショウケースの中にあるケーキを見て、あれを食べたいと親にせかむ姿そのものです。

みなさんも経験があるでしょうが、親が本当に子どものことを考えているのなら、子どもの願いどおりにほいほいと欲しい物を買って与えたりはしません。子どもにとって最も良い物は何か、今与えるのではないとしたら、いつ与えるのが最善か。そういうことを配慮します。

神もこれと同じです。いや、私たち人間の親以上とさえ言えます。13節後半。「とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊をくださらないことがありますでしょう。」

私たちは様々のことを祈ります。お金のこと、病気のこと、将来の不安、人間関係の破れ。それはそれで必要であり、切実な願いで

す。もし祈りがかなえられたなら、私たちはそれで十分に満足します。

けれども神はそれで満足されません。まだ不足していると考えておられます。私たちにとって最も必要で、最も大切な物、聖霊を与えようとされていると語ります。

これを聞き、意外に思われたのではないのでしょうか。聖霊は姿が見えず、どんな働きをしているのかよくわからない。だから、聖霊をもらえたとしても、それがそんなに価値あることかぴんと来ない方が多いのではないですか。

私たちにとって、聖霊がどんなに大切な存在であるのか、主イエスの生涯を少し振り返りながら考えます。イエスが洗礼者ヨハネの手でバプテスマを受けられたとき、聖霊が、鳩のような形をして、この方の上になされました。その後、聖霊に満ちたイエスは四十日間荒野で断食され空腹を覚えられたとき、悪魔の試みに会われます。「あなたが神の子なら、この石にパンになれと言いなさい」という箇所は有名です。イエスは神なので、どんなに悪魔の誘惑を受けられても力強く悪魔を退けることができた、と考えるのは少し単純すぎます。この方は神でありながら同時に人でもありました。人としての弱さを引き受けられました。悪魔は巧妙に弱いところを攻撃します。もしこのとき、イエスが聖霊に満たされていなかったのなら、おそらく悪魔に打ち勝つことはできなかったでしょう。悪魔よりも神が弱いという意味ではもちろんありません。神であられるイエスが人となられたとき、聖霊の助けを必要とされるほどに弱くなられたということです。神である方さえ、人となられたとき、聖霊を必要とされたのですから、なおさら私たちはどうなので

しょう。

私たちは主の祈りでこう祈ります。「私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦しました。私たちを試み会わせないで悪からお救いください。」

もし、私たちが聖霊をいただくことがなかったなら、どうなりますか。私たちは、心の中でひそかに他の人たちを赦すことができなない思いを抱えて苦しんでいます。ほかの人の罪を赦さないのならば、自分の罪も赦されないのだと聖書ははっきりと語ります。もしそうであれば私たちは救われません。ただ滅びるだけです。もし聖霊をいただくことがないのなら、私たちの罪を赦してくださる主イエス・キリストを知ることはできません。たとえ知ったとしても、試練に会うようなことがあると、簡単にこの方から離れて行ったでしょう。

私たちは、あるとき主イエスを私の救い主キリストであると告白しました。なぜできたのでしょうか。自分の意志で、と言うかもしれませんが。

でもヨハネの福音書15章26節にこうあるのです。「私が父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」主の御霊をいただいたからこそ、イエスを主と告白できた。それが真実です。

最初、なりふり構わずにでもよいから求めなさい、と聞いたときは戸惑いました。でも今は少し理解できます。神はそこまで言われるほど、私たちのいのちのことを心配しておられたのです。私たちをひとりももらさず救いたいがために、なりふり構わずにでもよいから求め続けなさいと言われます。

これまでのことは、私たちが神に対して求めるという方向で考えてきました。でもそれだけではない。逆のことも言えます。神が私たちを求め続けている。探し求めている。心の扉を開こうとたたき続けています。父なる神はなりふり構わずにでも、非常識だと言われようが、真夜中であろうが、近所迷惑であろうが、それだけ私たちを救いたい思いで一杯なのです。

そのような方の恵みを覚えてまた歩んでまいります。